



氷の下の暗い顔

小松左京

角川書店

(7/31刊・¥860)

地球から、はるか二百萬光年の彼方、アン
ドロメダ星雲の外縁にある惑星上に、地球人
のものとしか思えない顔が、それも断末魔の
苦痛を浮かべた顔が、氷の下に浮かび上がっ
ていた……。『ゴルディアスの結び目』以来
の、ハードSF作品集が本書である。

ここで気がつくのは、そのオーソドックス
なスタイルだろう。冒頭で提示された謎(「歩
み去る」では、年をとらない若者たち。「劇
場」の、あまりに多すぎる演劇場。降りやま
ない雨「雨と、風と、夕映えの彼方へ」。そ
れが、やがて、惑星、人類、宇宙規模の謎へ
と発散していき、結末でついにその一端が姿
を見せる。最近、話題になった『星を継ぐもの』
は、その典型的一例といえる。しかし、最初
の謎は、「壮大な」イメージを孕^{はら}んでいなか
ればならないし、結末はそのイメージを矮小
化させてはならないなど、制約条件も多い。

これは、アイデア複合化時代の今となつては、
考える以上に難しい条件だ。よほどのハッタ
リか、知識がなければ書けない。ハードSF
の小松左京にして、年にわずか二、三編。こ
のペースもやむを得ないが、ちよつとさびし
い気もする。

(俊)